

むかし、あるところに、夫婦が住んでおりました。ふたりは、長い年月のあいだ、子どもをひとりほしいと思っていましたが、どうしてもさずかりませんでした。けれども、ようやく神さまがその願いをかなえてくださりそうなのですが、おかみさんにみえてきました。

この夫婦のうちのうしろがわには、小さな窓がありました。その窓からは、世にも美しい花や野菜のいっぱいわっている、きれいな庭が見えました。けれども、その庭は高い塀にとりかこまれていました。しかも、その庭は、たいへんな勢力をもっていて、世間の人たちからおそれられている、ある魔法使いのばあさんのものでしたから、だれひとりそのなかへはいっていかうとするものはありませんでした。

ある日のこと、おかみさんがこの窓ぎわに立って、庭を見おろしていますと、それはそれはきれいなラプンツェル（チシャ）のうえてある野菜畑が目につきました。みるからに、みずみずしく、青あおとしたラプンツェルです。おかみさんはそれがほしくてたまらなくなって、なんとかして食べたいものだと思います。

しかもその思いは、日ましにはげしくなるばかりでした。けれども、それがとても手にいれられないことはわかりきっていましたので、おかみさんはすっかりやせほそって、顔色もおおざめ、見るかげもないようになってきました。

これを見て、亭主はびっくりして、たずねました。

「おまえ、どうしたんだい。」

「ああ、ああ、うちのうらの庭のラプンツェルが食べられなかったら、あたしゃ死んでしまうよ。」と、おかみさんはこたえました。

亭主は、おかみさんがかわいくてなりませんので、

「女房を死なせるくらいなら、あのラプンツェルをとってきてやれ。どうなったって、かまうものか。」と、思いました。

そこで亭主は、夕やみにまぎれて、へいをのりこえました。魔法使いの庭にはいるがはやいか、おいそぎでラプンツェルをひとつかみとって、おかみさんのところへもってきてやりました。

おかみさんは、それでさっそくサラダをこしらえて、がつがつ食べました。ところが、そのおいしいことといったら、またとありません。そのためおかみさんは、そのつぎの日になりますと、こんどは、まえの日の三ばいもそれがほしくてたまらなくなってしまいました。

おかみさんをおちつかせるためには、亭主はもういっぺんとなりの庭におりていかなければなりません。そこで、またもや夕やみをねらってかけていきました。ところが、へいをのりこえたとなん、亭主はびっくりぎょうてんしてしまいました。むりもありません。すぐ目のまえに、魔法使いのばあさんが立っていたのですからね。

「おまえはなんてずうずうしい男なんだい。」

と、魔法使いは亭主をぐいとにらみつけて、いいました。

「わしの庭へはいりこんで、どろぼうみたいにな、わしのラプンツェルをぬすんでいくとは。さあ、ひどいめにあわせてくれるぞ。」

「ああ、どうかおゆるしくださいますし。」

と、亭主はこたえていいました。

「どうにもいたしかたなく、こんなことをしでかしたんでございます。じつは、女房めが、窓からこちらさまのラプンツェルを見ましたんで。すると、どうしてもこれがほしくなって、ひと口でも食べないことには、死んじまうなどともうすものでございますから。」

これをきくと、魔法使いはいかりをやらせて、亭主にいいました。

「ほんとうにおまえのいうとおりなら、ほしただけラプンツェルをとらせてやろう。そのかわり、ひとつだけ条件がある。おかみさんが子どもを生んだら、その子をわしにくれなければいけない。その子はしあわせにしてやろう。わしが母親のようにめんどろをみてやるよ。」

亭主はこわくてたまらないのですから、なにかも承知してしまいました。

やがて、おかみさんがお産をしますと、魔法使いのばあさんはさっそくやってきて、その子にラプンツェルという名まえをつけて、いっしょにつれていってしまいました。

ラプンツェルは、お日さまのてらすこの世のなかで、だれよりも美しい子どもになりました。ラプンツェルが十二のとき、魔法使いのばあさんは、この子を森のなかの塔にとじこめてしまいました。その塔には、階段もなければ、入り口ありません。ただ、ずっと高いところに小窓がひとつあるきりでした。

魔法使いのばあさんが塔のなかにはいろうと思うときには、塔の下に立って、こうよぶのです。

ラプンツェル ラプンツェル

おまえの髪をたらしておくれ

ラプンツェルは、長い美しい髪の毛をしていました。まるで、黄金をつむいだようにきれいでした。魔法使いの声をききますと、ラプンツェルはあんだ髪をほどいて、窓のかぎにまきつけます。すると、髪の毛はするすると二十エレ（約十二メートル）ほどもたれさがりました。魔法使いのばあさんはそれにつかまって、よじのぼっていくのでした。

それから、二、三年たったときのことでした。あるとき、王子が馬にのってこの森のなかにはいつてきて、この塔のそばをとおりました。すると、それはそれは美しい歌声がきこえてきました。王子は思わず馬をとめて、じっとききほれました。それは、さびしさのあまり、こうして、美しい声をひびかせては、時をすごしているラプンツェルの歌声だったのです。

王子は上へのぼっていかうと思って、塔の入り口をさがしてみました。けれども、どうしても見つかりません。それで、しかたなくお城へかえりましたが、その歌にたいそう心をうごかされたので、それからというものは、まい日森へでかけていって、その歌に耳をかたむけるのでした。

あるとき、王子が木のかげにいますと、魔法使いのばあさんがやってくるのが見えました。そして、その女が上にむかって、

ラプンツェル ラプンツェル

おまえの髪をたらしておくれ

と、よびかけるのがきこえました。

それをきいたラプンツェルが、あんだ髪の毛をたらししますと、魔法使いはそれにつかまってのぼっていききました。

（あれをはしごがわりにしてのぼっていけるのなら、ぼくもひとつ運だめしをしてみよう。）

そこで、そのつぎの日、くらくらかけたころ、王子は塔のところへいって、よびかけました。

ラプンツェル ラプンツェル

おまえの髪をたらししておくれ

すると、たちまち、髪の毛がたれさがってききましたので、王子はそれにつかまっただけでいきました。

ラプンツェルは、さいしょ、いままでに見たこともない男の人がはいつてきましたので、ひどくびっくりしました。でも王子が、たいそうやさしく話しかけて、

「ぼくは、あなたの歌にすっかり心をうごかされて、そのため心のおちつきもなくなってしまったのです。どうしても、あなたにあわずにはいられたかったのです。」

と、話しますと、ラプンツェルのこわい気持ちも、ようやくきえうせました。それから、王子は、

「ぼくの妻になつてはくれませんか。」

と、たずねました。

ラプンツェルは、王子がわかくて美しいのを見て、

（このかたなら、きっと、ゴートルおばあさんよりもあたしをかわいがってくださいわ。）

と、思いましたので、すぐに、はい、とこたえて、じぶんの手を王子の手の上にかさねました。そして、ラプンツェルはいいました。

「あたし、ごいっしょにいたいんですけど、でもどうやっておりていったらいいのかわかりませんわ。これから、ここへいらっしゃるたびに、絹ひもを一本ずつもってきてください。それで、はしごをあみますわ。そして、はしごができたら、おりていきますから、あたしを馬にのせて、つれていってくださいな。」

そして、そのときまで、王子がまい晩ラプンツェルのところへくることにしました。なぜって、昼までは、おばあさんがきますもの。

魔法使いのばあさんは、そんなことになっていようとはちっとも気がつきませんでした。ところがあるとき、ラプンツェルがなにげなしに、こんなことをいってしまったのです。

「ねえ、ゴートルおばあさん、どうしてなんでしょうねえ。わかい王子さまよりも、おばあさんのほうが、ひきあげるのに、ずっとおもしろいわ。王子さまは、あつというまにあがってきてしまふんですけどねえ。」

「ええ、このばちあたりめ。」

と、魔法使いはどなりました。

「なんてことをいうんだい。あたしや、おまえを世間からひきはなしておいたつもりだったのに、よくもひとをだましたね。」

おばあさんは、腹だちまぎれに、ラプンツェルの美しい髪の毛をひつつかむと、それを二巻き三巻き左の手にまきつけました。そして、右手にはさみをとって、ジョキ、ジョキと髪の毛を切ってしまいました。ですから、美しい髪の毛はあまれたまま、床の上におちました。

そればかりか、おばあさんはなさけようしやもなく、かわいそうなラプンツェルを荒野原へ追いやってしまいました。ラプンツェルはここで、それはそれはつらい、みじめな日をおくらなければなりませんでした。

いっぽう、魔法使いのばあさんは、ラプンツェルを追いだしてしまったその日の夕がた、切りとった髪の毛を窓のかぎにむすびつけておきました。そして、王子がやってきて、

ラプンツェル ラプンツェル

おまえの髪をたらしおくれ

と、よびかけたとき、その髪の毛をおろしてやりました。

王子がのぼってみますと、どうでしょう。かわいいラプンツェルのすがたは見えず、魔法使いのばあさんが、にくにくしげな、ものすごい目つきで、じぶんをにらみつけているではありませんか。

「はっはっは。」

と、ばあさんはばかにしたようにわらいました。

「かわいいおくさんをつれにおいでかい。だがね、きれいな小鳥は、もう巢にいやしないよ。歌もうたやしないさ。ネコにさらわれちゃったんだよ。おまえも、ネコに目玉をひっかかれるぞ。ラプンツェルはもうおまえのものじゃなくなったんだ。もう二度とあれの顔を見ることはできなかるうよ。」

王子はかなしみのあまり、われをわすれて、もうどうにでもなれと、塔からとびおりました。命はたすかりましたが、おちたところにはえていたイバラのとげに目をつかれて、王子の目はつぶれてしまいました。

目の見えなくなった王子は、森のなかをさまよい歩きました。食べるものといえば、木の根や草の実があるばかりでした。王子は、かわいい、かわいい妻をうしなってしまったことを、ただただなげきかなしんでいました。

こうして、王子がみじめな思いをして、二年、三年とさまよいまわったあげく、とうとう、あの荒れ野のなかへまよいこみました。こここそ、あのラプンツェルが、じぶんの生んだふた子の男の子と女の子といっしょに、あわれなまい日をおくっている野原だったのです。

王子は人声をききつけて、その声になんだかききおぼえがあるように思いましたので、声のするほうへと歩いていきました。こうして、王子が近づいていきますと、ラプンツェルのほうで王子に気がつきました。ラプンツェルは王子の首にだきついて、泣きました。

ラプンツェルの涙がふたしずく、王子の目をぬらしますと、ふしぎにも、王子の目はもとのようにはつきりしてきて、またむかしどおり、ものが見えるようになりました。

王子はラプンツェルと子どもたちをつれて、国へかえりました。国では、人びとが大よろこびでむかえてくれました。それから、みんなは長いあいだだのしく、幸福にくらしました。

底本：「グリム童話集（Ⅰ）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷